幹事長が聞く、
新人会計士議員の抱負
vol.2

参議院議員
竹谷とし子
×
政治連盟幹事長
木下俊男

国の経営コンサルタントとして「財政の見える化」を進める！

「財政の見える化を進めるためにすべての業務を把握したい」と、
精力的に委員会等に参加されている竹谷議員。
問題解決がストレス解消とおっしゃるバイタリティには、木下幹事長も感心しきりです。
推進力抜群の竹谷議員のビジョンをお聞きください。

国会議員を目指したきっかけ

木下　竹谷議員は、コンサルティングの分野で活躍されていたわけですが、どうして国会へ出ようと思われたのですか。

竹谷　きっかけは公明党からお話をいただいたことです。私自身は政治の分野に進出しようという意識はほとんどなくて、経営コンサルタントとして、経済界の中で社会に貢献したいと思っていました。公明党からお話をいただいて、政治の分野に入ることでもっと大きく社会に貢献できるのではないかと思って決心したんです。

木下　いま委員会はどこに所属されていますか。

竹谷　財政金融委員会と議院運営委員会、政府開発援助等に関する特別委員会、それから3年間の期間で調査を行う「国民生活・経済・社会保障に関する調査会」に所属しています。党では女性委員会と青年委員会で副委員長、国際局では次長、行政改革推進本部公会計委員会の事務局長、また東京都本部の公会計制度を検討する委員会の副委員長という感じです。

木下　ものすごい数の委員会に参加されていますね。

竹谷　私は「財政の見える化」を公約の柱にあげていますが、そのためには各省庁が行う政策全般について理解していなければいけないと思うんですね。ですから、できるだけ会議に出席して、担当させていただくようにしています。

地方から進める公会計制度改革

木下　いま公会計の話がでましたが、竹谷議員はどのようなビジョンをお持ちですか。

竹谷　日本の公会計の問題は、現金主義・単式簿記で予算も決算も行われている点ですよね。

決算に発生主義・複式簿記を導入していない国は先進国では日本とドイツだけで、最新情報ではドイツも発生主義に変える予定だそうです。財政状態が一番悪い日本が唯一、いまだに現金主義の単式簿記会計だけで決算を行っているのは問題がありますし、国会の中で財政に対する問題意識の低さが浮き彫りになっていると思います。

木下　日本公認会計士協会でも、国会議員や官庁に「分かりやすくて比較可能性のある財務諸表にしなければいけない」という話

竹谷とし子
参議院議員

1969年生まれ。創価大学卒。監査法人勤務を経て、1996年から経営コンサルタントとして発展途上国の支援プロジェクトなどに携わる。元アビームコンサルティング株式会社執行役員。公認会計士。

をするのですが、なかなかその必要性を理解していただけません。どのように説得をしていけばよいと思いますか。

竹谷　やはり国会を動かすには、国民の皆様から「おかしいじゃないか」という声を大きくあげて頂くことが一番です。そのために私は、選挙期間中から「国の公会計はいまだに単式簿記・現金主義会計のまま。企業のように無駄遣いが見えやすい会計にしなければダメだ」ということを言い続けてきましたが、そのこと自体を知らない人が多いんです。ですからまず、国民の皆様に「公会計に問題がある」ということを認識していただくことが大事だと思います。

木下　そこの部分は非常に重要ですね。

竹谷　それで私は、公明党の地方議会改革の柱の1つに公会計制度改革を入れて、地方議員の方々に「財政の見える化」について地方議会でも声を挙げてくださいとお願いしています。実は公明党は、地方議員の数が3千人以上いて、政党のなかで一番多いんですよ。いま地方議員の皆さんの意識が高まってきて、「勉強したいから資料を送って欲しい」という電話がかかってきます。

木下　なるほど。地方自治体から公会計制度改革を起こしていくということですね。

竹谷　東京都で複式簿記・発生主義を導入して財政が改善したという前例がありますし、千代田区もずっと前から発生主義会計を先駆的に導入しています。千代田区は、石川区長自ら「発生主義会計をやるんだ」と職員に指示して、約900ある事業ごとのコストを出しています。たとえば、特別養護老人ホームの1床当たりいくらかかっているか、学校給食に1食当たりいくらかかっているかなど、その事業にかかった人件費や建物の減価償却費も計算して、一つ一つの事業コストを担当の職員の方が作るそうなんです。それによって職員の方々のコスト意識が大きく変わったそうです。そうして地方自治体の意識が高まってくると、国もやらざるを得なくなりますよね。

チェック機能の重要性

竹谷　私は、日本には本質的な問題があると思っています。それは「政府は間違えない」ということが暗黙の了解となっているところです。これは政治だけではなくて、原子力発電や航空機にしても「事故はゼロである」ということが前提になっていますよね。予算も、その予算は正しいという前提で決算はおざなりです。でも、現実には事故も起きているし、間違いもあるんです。人間というのは、もともと本質的にそういうものを持っていますから、リスクがゼロということはあり得ません。

木下　欧米は「リスクがある」ということを前提に制度がありますよね。

竹谷　そうなんです。日本は問題が出て来たときにすごく叩き合うけれど、問題を起こさないようにするためにどうすればいいかという発想が非常に弱いです。民間では日常的にPDCAのサイクルで、プラン・ドゥ・チェック・アクトを行うようになってきていますが、国会では、予算は完璧という前提ですからチェックは必要ないということで、改善というアクションもありませんでした。18年前に公認会計士として初めて国会議員になった若松かねしげ元総務副大臣が決算の重要性を唱え始めて、2年以上かかっていた決算も翌年度内には行うようになり、最近は少しずつチェック機能も高まってきましたが、まだ弱い。だから改善も弱いです。これを強めるためにはチェックをもっと行う必要があります。そのためには「財政を複式簿記・発生主義会計に変えて正しく透明性を高めた形で開示する必要がある」ということです。それを私は参議院議員の6年でやりたいと思っています。

公認会計士法改正をどう見るか

木下　この政連ニュースが出る頃には、公認会計士法の改正法案が上程される予定です。改正法についてのお考えを聞かせていただけますか。

竹谷　改正の大きな部分は、「企業財務会計士」という資格を新たに作るということですよね。私は公認会計士という職業会計人が増えることは、非常に良いことだと思うんです。公共分野に会計が分かる人が非常に少ないので、国や地方公共団体等の財務書類を、他の先進国並みのレベルに上げるには、公共分野に複式簿記・発生主義会計が分かる方が増えなければいけないと思います。そのためには、公認会計士や会計の専門資格をもっている人がどんどん入っていける形が必要だと思っています。

木下　法改正の目的は二つあって、一つはおっしゃるように公共事業体や企業内の会計実務能力を向上させようというものです。もう一つが未就職合格者の問題で、これは単に合格者が就職できないということだけではなく、彼らは就職して実務経験を積まないと公認会計士の資格が取れない。つまり「国家試験に合格したのに資格が取れない」ということですから、それは制度設計がおかしいということで改正をお願いしています。制度設計の中身はまだ議論の必要があると思いますので、竹谷議員にもご協力をお願いしたいと思います。

木下俊男
政治連盟幹事長

1985年から2005年までPwCニューヨーク本部事務所、ロサンゼルス事務所、デトロイト事務所で日系企業統括パートナーを歴任。帰国後、みすず監査法人の国際担当理事、評議員等。2007年より日本公認会計士協会専務理事、2010年日本公認会計士政治連盟幹事長。公認会計士、米国公認会計士（NY州、CA州）。

竹谷議員のストレス解消法

木下　国会議員の仕事は、女性であることでハンディはありますか。

竹谷　感じませんね。私が所属している政党が公明党だからかもしれませんが、若いとか女性であるとかで発言が抑えられることはないんです。女性は社会の中で発言権が弱いということで、かえって発言を聞いてもらえるところもあると思います。

木下　竹谷議員は新婚でしたよね。

竹谷　もう1年半以上になります。

木下　忙しくてご主人と食事をする時間もないんじゃないですか。

竹谷　私のほうが夜遅く帰りますが、実は夫の趣味は料理なんです。私自身も料理するのは好きなのですが、今は「すごく美味しい」と感想を言って褒めたたえることに専念しています（笑）。健康面なども気づかってくれますので、とてもありがたいです。

木下　それはいい人、見つけましたね（笑）。ストレスの解消はどうしているんですか。

竹谷　私はもともと仕事とプライベートを分けて考えていないんですよ。だからプライベートで遊びに行って解消するということはあまりなくて、何か問題を解決したときにすごく喜びを感じて、ストレス解消になるんです（笑）。

木下　政治の仕事は問題だらけだから解決のしがいがありますね（笑）。

竹谷　私は国の経営コンサルタントとして、国の経営改善を行うんだという気持ちでやらせていただいています。この参議院の任期6年は、私に票を入れてくださった80万人を超える方々から委託を受けた経営改革プロジェクトだと思って、問題点を一つひとつ、こう解決しましたとメルマガやブログで報告しています。経営コンサルタントのときもそうでしたが、大変な仕事でも、それをやり遂げて「あなたに頼んで良かった」と言われたときにストレスが消えるんですよ。その一言で嬉しくなってまたやろうという気になるんです。

木下　我々の業界もいろいろ課題がありますので、ぜひ解決の糸口を見つけてストレスを解消してください（笑）。今日はありがとうございました。

※対談は2011年2月10日に行われました。